



旧山口村道の今昔

松本 洋

長久手の東のはずれに一本の廃道がある。中世からの古道で「山口村道」といった。名は瀬戸の山口に由来する。上郷地区の大草を東に進み北東に延びる山道がそれである。東山を経てサンショ洞を横切り峠を越えて旧山口村へ通じる村道であつたらしい。いまも利用されているのはサンショ洞を左に見てすぐの檜の大木のところまででその先は深い藪に阻まれ通行できない。土地の古老の言に「ボクが子どもの頃もここから先は通れなかった。」と言ふところからも廃道となつたのは昭和の初め頃であらうか。

かつて大草地区では旧暦6月16日の天王祭りとともに虫送りの行事もおこなわれたらしい。松明をかざした村人の行列はこの道を村境の石亀堂まで行って人形送りをしたという。また近代の一時期、山口神社の郷社祭りに北熊、大草、前熊のオマントの隊列もここを往来した。また道沿いでは亜炭の採掘も行われるなど人々の生活に欠かせない道であつたが東に新道が整備されたことにもないその役割を終えたのである。

ここに一つ面白い余話がある。今から30年ほど前この藪の廃道を北へバイクで走りぬけた猛者がいたらしい。驚くほかにいがさすがに今はもう無理であろう。いつの世も冒険者はいるものである。

秋日和、稲刈りの憩いに暫し古道に佇み往時を偲んだ。エッサイホーサイ、エッサイホーサイ、藪の奥から警固祭りの掛け声につづいて村人たちの虫送りの騒めきが仄かに聞こえたような気がした。幾百年の歳月がここに

ついでながら、この辺りは少しづつだが里山が蘇りつつあるという。自然との共生こそ豊かな心をはぐくむ揺籃ではなからうか。次世代に継承したい一風景である。

参考文献 小林元著

「長久手の地名」

読者の投稿で初めて知った「旧山口村道」。いったいどんな所？

晴天に恵まれた某日、ボランティアの方に特別に案内していただき、旧山口村道に向けて編集部員が出発しました。



← サンショ洞 ↑ 蓮池



蓮池やサンショ洞を通り過ぎると、いよいよ旧山口村道の入り口です。先が見えないうっそうとした藪の中に、一歩足を踏み入れてみると道らしきものがあり、有志の方々の努力により、かろうじて歩けるようになっていました。



瀬戸に向かって分け入っていく部員

長久手と亜炭

長久手の地下60mくらいまでの地層は、約500万年前から堆積されてきた亜炭(石炭の一種)の宝庫でした。安価だったため需要が多く、大正2年当時、長湫の東では2人にひとりが亜炭関係の仕事についていました。エネルギーが石油に移行するにつれ亜炭鉱は閉山し、多くの坑道が空洞のまま残されました。

昔は両手を広げたくらいの幅と推測され、馬も通ったそうです。村道沿いは今でも亜炭坑道のあとがあり、危険なためやむなく引き返しました。

その後、長久手市郷土資料室を訪れ、亜炭の歴史や坑道の模型などを見て、当時の人々の暮らしと山口村道との結びつきを改めて感じながら、探索を終えました。